朝鮮征伐記

六七

内閣文庫
和書類
三四九八一號
五冊
一六八函
六三架

内閣文庫
番號 和 34981
冊數 5（4）
函號 168 63

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M
colorchecker
x-rite

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

圓416.

朝鮮征伐記巻第六目録

大明軍評定の事
沈惟敬とらハるゝ事
南原をせめおとす事

巻第七目録

全州開きのぞく事
平儀千儀のこと　付　全義館のこと
大明大軍朝鮮へ入事

朝鮮征伐記巻第六

一　大明軍評定の事

石田三成は国に帰せられぬ。朝廷の大臣并総督経理等会議して。朝鮮へ援兵を催し。軍勢のだんかうあり。又日本人これをわたさば。数度朝鮮よりわれども。毎年よつまびらかに登州萊州より順かに来るべき也。其上天津の衛より。山海関まで陸路は百里あまり。其海手よりは旅順と相対して。その間二百里なり。順風には須臾のうちに来るべし。登州萊州は海口より入りて中国の襟喉なり。みなとは淮安よりてつゞき。二千里の間なり。南ぢかく。又山東江北の藩籬なり。此地方よ巡撫統

とくべしとそれにて周延儒をして毒殺して
孫死によりてまもり李成梁勲に成辞とましてその孫
きと倫りしむにもよに孫経略が為にしてに為に三
千人を統領して孫順乃口によりでまわりて天津を保
守し浙兵の遊撃三千人をまかつく鴨緑江に至り
そまいわ海防とならしむ又江淮盧が為にとして孫順
しわ天津よりてふさまで大軍の籠もるべき処
二所あり一には大沽といひ二には芦台といふおよ
きうの百五千余里西所の兵をまもつくおさまもてき
細そびの事どのくまり兆乃兵とそのへてかり
とわしせらるべしとまつ太明へへらぬ事随とかり

さり内閣楊陽が為に寧鉄牢撫の三所をとつて
軍府をとらき兵を統り西とならしむ高の方鴨緑部
此の軍務に攝したがひよとけわまんべし其の
まは毛総兵官の光に擬云しあつく奮威を
し死づさとひたわらくハ経兵とえらんで利に
行むきこ備のと逆しだわようくざらに此ハ虎踞
乃てきの私心と推べし王儀より釜山まて一千
二百六十余里王儀よりわらまもくかうまで一千二
百里ぞうり為るよざられぞかせんかいてうせん
中にこれ仕もしてもらむりわけて出りぞくぞう
里とくどまりくだり日本人へとりくきことや兆んて命

軍粮とぼしければ兵をたむろし、もろ手に屯田をなし、我
を又兵粮とゞこほりなく何の足りなきことをなし、朝鮮
人はそのゆゑに大明の催援ぐんぜいもやう〳〵しきをこ
ころ氣を失ひてこゝにおいて我農をはじめ、商
賈を通じ、道路をめぐらし、樹畜のみちとひろ
め、山澤の利をひらき、錢を備へ、業を勵して軍用
を足し、開城平壌を始め宮でこれより次第
に京畿忠清黄海のところ〳〵をおさめ、人をとゞめて
それより兩とも城としてうけとりとぞ

すゑやかにつまとはしたまはんかん。はしらせ
てもんのこゝろまとなし。高麗よりみなともハ
てきの居所をしらば。こゝぞりよふりへして盛を
援をこふべし。高麗より此は唯前の地をわたで
まもりかためて尺寸をもうしなはじやうとす
べしとまうしかりども。まづ京計をなして。
たまく會寧よりふときはさくかよ手段
おりいみしくもまづ漸計をなしてなふずらくま
わくどいをりとたすくるなりがたし。一旦利欲
うしなふこの気を励もことべらしんと我をそへるける
二月の者。鎮經畧を文任とやめられ。朝廷の[illegible]

侍郎邢玠よ命じて經畧とし。楊鎬を經理とし
巡撫麻貴を同じく劉綎と南北の大帥とし。ちかく
を浙江閩廣の兵と百くもつく朝鮮を援しと
邢玠ハ山東青州へあり。糧運に主にして識畧あり
万暦廿六年正月廿二日遼雲よりうつく經畧よありり
命をうけてかなとに。麻貴とつかはすことをたてまつりて
さく。宣大の兵乃いそぐと神そげなへのさまざまなる
べからに赤じて釜山をとらん。釜山たやすくおつ
む行長はさりこともりん。然らば清正ハうごくをそ
らん。一大すは一箪にさぐらべしとぞいへり。邢玠國
をうるがへものあまりば兵はまづそのわくこともなく

てきうしそのうらよたゝかふ。今計盡つきてこゝに定まる
ぞして。おのゝ險阻に行ばこれをつゝやぶれども丑
ふりん。一度敗軍せば。てき機に乗じ。ふゞく追
落し去りなば。我軍勢氣つかれくやつてびんなかるべし
そらし。我おもふにまづ楊元吳惟忠の二をふへとゞめ
りて王城に入。両将を全羅の南原と慶尚の大丘
慶州よたむろせしめ。麻貴ハ王城に居て両方の
うけとりに。楊元ハさころの兵をよ南原乃城
郭にげまやぶられ。又濟州の
そうくちへ。慶尚一路ハ又摩貴はてさきのたふ
そうふ吳惟忠孤軍にして。慶州に入らし。今昨

楊元ハして兵糧を運送させ。糧餉をましに城門して
城郭をきびしく守り堅固にさせ。呉惟忠ハ慶
州にゆきて。城門をとぢこもりてきびしく守る。七月
大明乃大軍の來らんを待てまてども來らず
とりあへず刑玠ハいまだ山海関をもいでず。麻貴ハまづ王
城にありて。ひそかに二将に諭して軍勢を國王に渡し
國中の兵糧をそこへ移しかくして地方をまもる
て要害の城をかためたまひしかば。朝鮮の國王ハ
朝鮮乃命をうけて將兵をわけて慶尚の地
兵使成允門防禦使權應銖をして慶州よりむ
まりく島嶼乃みちをふさぎ。兵使宣居怡

寧りよそでまづく釜山乃てうきとおもひば統制使元
均等舟師をまうけて竹島加徳のてうり
そおふをのくそけさつて先て壹表をこうとぞて
て大明乃兵のこゝろをまづ文禄をとうきん數年乞
國とおゝく國中におそぞこの兵おしくてきこえしと
そらいふ事ゝバちうせんをかろばうんぢうせんかろびへ大明
こも文勢よめしまうれくなりゆべし者ゞ大明賢
能の書とえんで朝鮮の司乃發とおし八道そ
理しふそのく城をとまゝのぞかてゝ山城よう川ゐ
兵をもてめくてきさとうえんといふぴ乃朝せん國
王に達しられば元帥とゝもに大明へまづ朝國をと

られんことをあやぶみ疏していそぎ朝鮮むかしより
三都あり漢城開城平壌なり三城ともに數百の都
乃たかきはるれ數千里の西の者にとゞく嶺樓としる
今國王漢城に居す其元荊棘ぶまで陰を陰ふさ
弥壙兵よろしく府命とつぎ升斗と合とを民の
山林にわき軍隊をうしあれ百よ二とおもしきまとひ花武
かうまうまのさうしの稀りてきたるがひ欠ましばらく
らくべき極おしぞ太明乃發人來く八道とおる程
せられしこを粮米とそなへべきやうおしとおげる
によろしく山獄をさぐ免られき四月より五六月よりてうさ
日本へとめんく城ゑめんとしててきたらんば大明の

軍兵はいまだ来らじなり。朝鮮人へはさるかたに入るべきよし云ふ
べしとぞ。かく陰宴の地と申すにて、たゞひとつ併せの
往来する所しかし沈惟敬のこと日本の陣へ往来し
出かけてわかく宣寧の一まとちは日本人と源しく一
家のおごりたる内にはわ惟敬をして日本の兵を徴
しても人まとつひに又かんべくもわは朝鮮のこれをと
さてそれより一ツは安方の三都天地急降なれば
惟敬が和議となりてもどろじ兇惟敬がて封と塗
利害をとくべりしたり。たうざやすあひよりゆゑ絶つて
日本はわ三とをとりて全羅は去地肥饒にして朝鮮
の府緒なり。慶尚道は門戸なり。忠清をたるによりて

てわたりちかなり。慶尚道はさて全羅なりけり
は他のこゝろありといふ先根本のそなへりてしとゐるを
と海路をとりつくいふでさて全羅よりつくべきとち
して西海一帯ちかふしては鎮たる済川へこなたこそ
の要害となりて、さて船は海上より掠奪をはかりてぬ
雨りかく順風ならば一二日より鴨緑江によりてうるべし。其うれ
開城平壌をたもちとりて先の道もわりんぴとり
朝鮮のことにありしは日本人へ海路よりて入て忠清そうに
ましを全羅慶尚の二道よりいふんとなれば日本
より朝鮮へは南風なり。朝鮮よりは遼東へそ
むかふは西風によりて日本人への海路よりは入て

まづ八卦二爻はまづ天にあがりてより、て也天地乾坤を
中あらはしくむてさらにそれなれば陸地ハ遼遠と
さうぞんのそれをもとぐりは山海空にへこれよりも二位
わかれて四方にわたつて其円の四隅をとぞらば東陽后海
いふやうなりしくあらぬべしのかなしんにこ爻とゆるしわかふ
べうしん惟敬西方のあると調略しぱ其のまゝつくしと乃
ぶれあをたがひまぱさ海くしよりきぞらがりとひのだ
もとはじめぬん封乃すすとまつくるたるんとたうしぱ今までこ
高とまつくるきんをとそりし太明乃そうぞをわれるは
日本のよろづやうなれぱはかりかり又月に極楽帯國つる
えんじゆえて王職にいてこうも惟敬よ日本勢乃為寡と

とふ。惟敬こゝろよわくしてのぞく。さと要とされて
続いておほうしろで兵を去りうけて略縁江と海より上
策ありべしとそり文書に紛を左々かつち平調
信と日本よりつかひしくさとわたし時分とそふ惟敬又
これとわすてかりそろく調信とつうしんわり和の年をぞ
川さんたはよやうとそり調信六月のそぶ先開白より
まこと実白のいそく朝鮮書番をとさうがら今金銀より
清三位のあ統まこれが為也総軍勢八月朔日にそく
よ金羅乃地方に会ひとりて兵糧とし。あらゆるの職
と世見んとゆしとそんで海別をせ見とらべしぱ戸よ
とひあり〃さ此時は兵を花高よめへし。国儀より

ちまよひ西生浦の城へうち入らば。かの城によき人数
をぞ入くさんすよそれわるといへ。十余日おつるといへ共大なる事
るのわけとぞや。とき見えず何よおそく城よのぞこ三茶よ
籠城をせ見えさるわ力をつくしてうちひ死傷を
とり大人りこんがとわりせそ功を立べし。とわづて
だに妻さうりんだ日本よおわのあんぐんくの妻子を
あらむべしと。軍二度に行つられ清正行
もとぞして見え大ね達は下知よ押ひて一王祖代を
つかひてやきれなは日本大明の兵金吾よて
ふかつきひとて見せあがらしと申されず。関白太
そしにがいてこゞのとみこゑの大明乃兵数万を

地よわりといへど。一筆に吾勢とせ見えとをしぬ。今大
軍にてうごいて見るいのちの事をるべきと。とて其逆
べからじとてげましめ給ふ。七年元月の比日本の大
兵一時に渡海をとべし。宇喜田秀家ハ釜山竹島を
兵ハ豆ヶ吾勢とわ金海をむかひたらくべし。毛利
秀元并西生浦の所の兵ハ慶尚とわ密陽大丘
とまりく金海よむかふべし。六月十日ごろに。相従渡海
しそ出るを清正行長并鍋島太夫わく中達し。然を
そのぞてもそんそ敵なし。惟敬が下知とゆるて。大
明へよ案し。子細を陳ずるにてよりしが。せん日なく朝
鮮の僧松雲大師などとひ密帖を清正よもちて

いはく。刑部尚書大兵七十万将軍勅をうけ兵を清正に
西生浦営書にいはく大明の兵出兵
是我可殺也朝鮮ハ弱兵今兵向我殺也若大明之兵
暁仇一戦則朝鮮国可定言大明北京焼却く
五十四首幸又喜也降可異惟敬とちじ忽ちに大明
朝鮮の兵をはじめ返書にあるていよくいかにもやまきくを
むと日くに大明の兵と見城くと思めんとしも惟敬をしくべきや
うあくして俄として再度新よきいく相級とぞ云。
又清正が臣金大夫は書を以て出でさ日くいふ
さんしも。今大夫が返書清正がかんしとおなじそれは道
是さつまのつくぞ見てし

沈惟敬擒らるゝ事

日本人ハ三成をさきとし先へすゝミしかバ大明人ハ日本
の兵を撤してなくべれしが西方ハ惟敬をせめければ
それときゝわ術つきて返答にも及ざれハ是を
ど石司る囚獄せられ惟敬男もろともしゝまち打ければ
日本人よ其しかし一命をなんとせしハ先を理ふかし文
刑部侍郎そしれ先には惟敬が罪をわすれぬさく国をあん
づし先石司る事を奏してとんよ書くて使をかけ
てこれをとらへけれども思へりさるがゆゑにゆるし
勅をうばひ日本の城へにげ來て大明乃吾衆と表て
もとくし是らハ功ありがたしといへども二乃

檄とけくつく惟敬かんとやまんじて文りけ人とゆう
くえとろとゝてうわてにとゞまりまけれよて惟敬ハつく
刑部侍郎としうゝんにむく其門よ在ハ其まゝと南京より
ゆるびへとゞるなるか人ハ釜山へゆくつま入べんとたくを
みわ南京よハ釜山まで七百里あれどたやすくも
へべきやうあし六月中に侍郎のもくぶ一定と勅れ楊
元は遼兵二千人をくへて南京よりうつし呉惟忠劉
綎らも勝し令を密に怡とまちくぐり元均よおもく候去
とまろうけのひれ次かへとみせてござらり惟敬が平生を
しらすへいつくそれのこころへゆづまで惟敬が男よもわて
みそとはやからんにとかくわけはら仕前米のあるにのが

れいのごとくおもてへハしきりに饗宴(きやうゑん)しまつさい誓(せい)をとりかけ
た先に二万人がわの人をつかはし惟敬(いけい)ハすぐに
もとより心ざしたのもしき事どもありけれバ國安(こくあん)と注進(ちやうちやう)し
を登山(とうざん)にやりて心(こゝろ)をいそがしむ行長(ゆきなが)ハかくてかへりし
ていくばくの時なりける其後(そのゝち)まで人を約しけれバ七
と約して惟敬(いけい)へとつかはし大明の孫竉(そんちん)を賞(くわい)より及
び小西(こにし)飛(ひ)ハ八百余人をともなひ朝鮮(ちやうせん)のさうの国
まゐらせんとし六月十八日平調信(しやう)此のこなたより
人数(にんじゆ)五百ばかりて海邊(かいへん)につかはし沈宣寧(せき)につかハ
し惟敬(いけい)とよびて講和(こうわ)せんとし時に釜山行候
のつとめのいく年にてやらん注竜陸地より釜山(ふさん)

よせてけり。つゐに楊元(やうげん)これをしのばせ急ぎ安辺(あんぺん)へ
つまびらかにし與(よ)左世(させ)沈宣寧の吉ハ十里(り)ばかりて惟敬(いけい)
をむかへ、かくして小西(こ)とのをそ先だて楊元(やうげん)
一きまびすりて日本人のあまたいりんしまし惟敬(けい)がつて
く和睦(わぼく)ハそのふるまじとの人こし楊元(やうげん)がらくさそ
よ威すそれんべからぞる遠慮(ゑんりよ)よくもよぎと勘忍(かんにん)すよ
やうでありや惟敬(いけい)がつくりまうろうもとさう(さう)べし
明る九月(くぐわつ)よ惟(ゆい)て人をつかはし清正(きよまさ)と講和(こうわ)し。一方
月半ばしてくらんとつよまとだて粗人(きやうぎん)のおとくにて
玄蕃(げんば)あんじられもとつやにほげのがるしとおひいまで総(さう)
督(とく)約(やく)をして事あれど官兵(くわん)へとさして坤票(こんぴやう)とお

しきりに是非によこなへ人をあらそふべしとしきりにすゝめて
丹城の方へゆかりけるもさしも総督ありしを止めはかりけるに
さやうならじと警護をもとへてとゞまり惟敬をつれ
日本の向守大明の禍根をのぞかしめんと
去ぬ八月十八日史をおつかひ陳璘が方とおほんもちた
日本の雑一面の経の和刀和紙たたに三百三千六十きん
衣裳黒細絹摩等日本の器あまた三百六千二挺
わり。今年より惟敬獄に今年正七年九月廿四日にいたる
されば陳璘は法のごとく官家の奴となり沈惟
敬も南陽にいけて人とたぶらかし、大明朝
鮮のために平壌のうちにてさばかれけるかいとはひさしや

ゆへありて朝鮮のまゝとらへとゞまりて功ありし日
本勢とゆかりて、ちかに大明の公の使をうけ枝
ゆへにわかれじや、宗盛と叢如し。日本に媚石国を
わざむき威を換し、其を城をうつすをもつてかろう
じてこれより刑総督はまさに実とむじして。これ
ともへんに援乃のうちまつとのぞくまうくと葉廷ことよう欽
として惟敬をゆるさん。とされ惟敬が利口に論じ
はされて、葉廷ことされをもつてはたえてつる
よ遼東の軍よえられ男の中國にはまように、利口の部
家をとりりへよと思ひていふ軍人の是とし人へ去りさる家
ならんや

安南をとせ先なりとしるす
沈惟敬がをしへけるにまかせ。楊元が志をとげざらりとして手を
楊元をとうしうられた。あそびりことをあくれば山海関をも
べきやうなし。一夜を時にいろふかきひ出し。安国安と名付
りし小西行長よりしるは。安南ふさしての兵を
し。兵をおこしておしひらきしらんばいつしやもとうるべく
し。安南のひがしよりもま上なる所あり。南よ三浪大
におうくなりて金海行島よ通ぜどこれ金羅道の門
戸なり。これよりる暇ひしやまんとてあくべし。鄭さん兵営のど
ころなり。閑山島は朝鮮の西海の入口にありて
生てに宮船をいくらかのちゃを阻截もとこれまさ

南原乃右陵そこり。総督がたもりごとくして楊元よ
遼兵三千をともへて。これを守りしが。又陳愚衷
兵二千を領し。全州にまもりて。南原の変
あらんをまちうけみつるところ。又朝鮮の将金応瑞李
元翼が兵二三千のかりあり。権慄が兵栄山城の内
にあり。閑山よりは元均が舟師を領してまもりとなし
ともに南原とたのみし。ただひとり鹿援となりしが
わがつはもの南原を攻むる八月にいたりて
めぐらして。にげさりしとまことにやうつらひけり
これは楊元が手勢を合して。うしろを攻めさんとありしが
小西をはじめ南原をとりまいて大閤の仕儀によりあぶらん

ところに済州中にあれども。大きにうろたへて南原をせ
めんと支度し。沈惟敬をひそかに縛しあつて七月
のころ。先大百姓白やましんで。逃役をのがれて
平地よりみてとうふうのわかれ。これによりて宣祖大
同の大明勢さしくられくて中旬によりて平壌
よつてくだる。麻貴を七月二日軍師にまかせておかれぬ
金乃大によりくだられて。つまのみなをとりれど
きに来る。山村舟師によりたなかわれ。かちむけやる二
おもをてかくし。これをこそ朝鮮元の将軍
元均閑山よわりし。釜山をうばひくに兵とあけて中
国乃勢は約し。釜山城とものびさわんとした。

のとし九郎さんの金蕩瑠宜寧に居て。勢を添へり
元均が之文安日付とうちもにつげさり。ゆきさき去ハ
南原とせめんとす。元均が舟師とまつくしほたるを
おそふんりとて思案もろおりうてあれど重ね字
て豊臣がつびに舟手の勢とうつり。元均が云
ことをひやぶらじとして閑山島とのりとり家
山まれへまいば。舟手乃勢た自由よ性なし
さうきかひよとしへとぞ。舟手一方ハ二三日のうちよ
元陽豆瓶漆りへて後陳乃陣方とまつぱ山不南原
とさまたるがつちりしこれよ横とえそ七月廿日
しわ。先手とかりおし。右より全羅表慶尚右道の三道

としまつりさんづあれど。小西を先手とし。宇喜田
秀家を大将とし。島津兵庫頭加藤左馬助脇坂次
蜂須賀阿波守長曾我部土佐守生駒讃岐守などかつて
五万余さ慶尚道を右よ見て全羅道へさしかかり南原
とせめんとし。一手ハ加藤主計頭を先手として。八月
朔日より。順によとしわして。毛利宰相秀元を大将
とし。黒田甲斐守浅野左京大夫中国九国の
勢とまじへて五万余騎慶尚道ハしかけ。密陽大丘
と経。全義館へうちかかり。黄石城よわ大のせいおハ合
戦をとげ。左衛たのさぶろずまつる。釜山の
城よ立帰せし。金吾中納言秀秋ハ西生浦蔚山

とたねとし南部安撫使へ伊徳雅系ほの六經らを八
千余あまりして密陽より金海へたてこもらせ胴筋より忠
清道よへらんと擬を朝鮮の軍標元翼ありしかとも寄
を置よ充満しられたかくさへぎらんとしらまんい
あふてひがしの方へあふされもびりまでり日本勢日々に
かさなりぬ。岸を置ハてこさあしどとくもふ不取あへし。楊
元にひどろひて。八月十日より射捐二軍をきしこせ平壌へ
のけつまり。南原平壌をまもり一千余里なり。小西等
喜田のよく機とえて手よりとけしこをかまへそもを
全州のうち後結とむすう約束と惟敬か志うせられぞ
徒出ねくでよりかしして全州の手当によそく。島津

兵庫頭加藤左馬の全州の手当によりてこまかにくむ
これをきけば。陳愚衷からしへとおもどくとらやうかし。同
するよ。小西宇喜田をの諸勢四万余騎引さしくと
城下へとしよせ。山下を殺火し。四方を楯麻竹葦
のおとくうちかこみこれ楊元ハおもさん全羅の兵馬
節度使李福男とたたさし城をまもり。鉄炮雷おちを
かくく射ちされども手よせてをとうしみりぞさされ
たよせて大軍なれども今へくせんちりぐく四方よう
とおよせるまうけられやうふ十五廿五にうちとと
こゝろ様をとつまり城へうけとうけをしへ入らんとれ
又おりそばうめくささりつく金歯らふ先おりの所

よ柵ども三重ふりて城中より突ておさるゝやうよ
ありしかへ四月の九日のさよなかよりつんにを見えよせすめる城兵
半より寄手へかゝるとてしきうんせめ口とをとこし
そのひげを城中をさし山中の鹿介とやもとめんと
そさびまゐるまじくとなるにすたゝかふ事よ菊門紙
うちやぶり。城へとしておひ尾乃具へとふつさ立れハ
宇喜田躰次郎兵衛尉秋家生駒藤堂ホつまを乏ろ
じとめんくのせめ口より打やぶりてのり入。揚
元帳中よりふかくこれを坐せく。かどろさ札を
家衆をとらうにせよづへ足をとあしめてにげ去
らり。侍雅安の寐圖流えそうく親第を殺てきつ

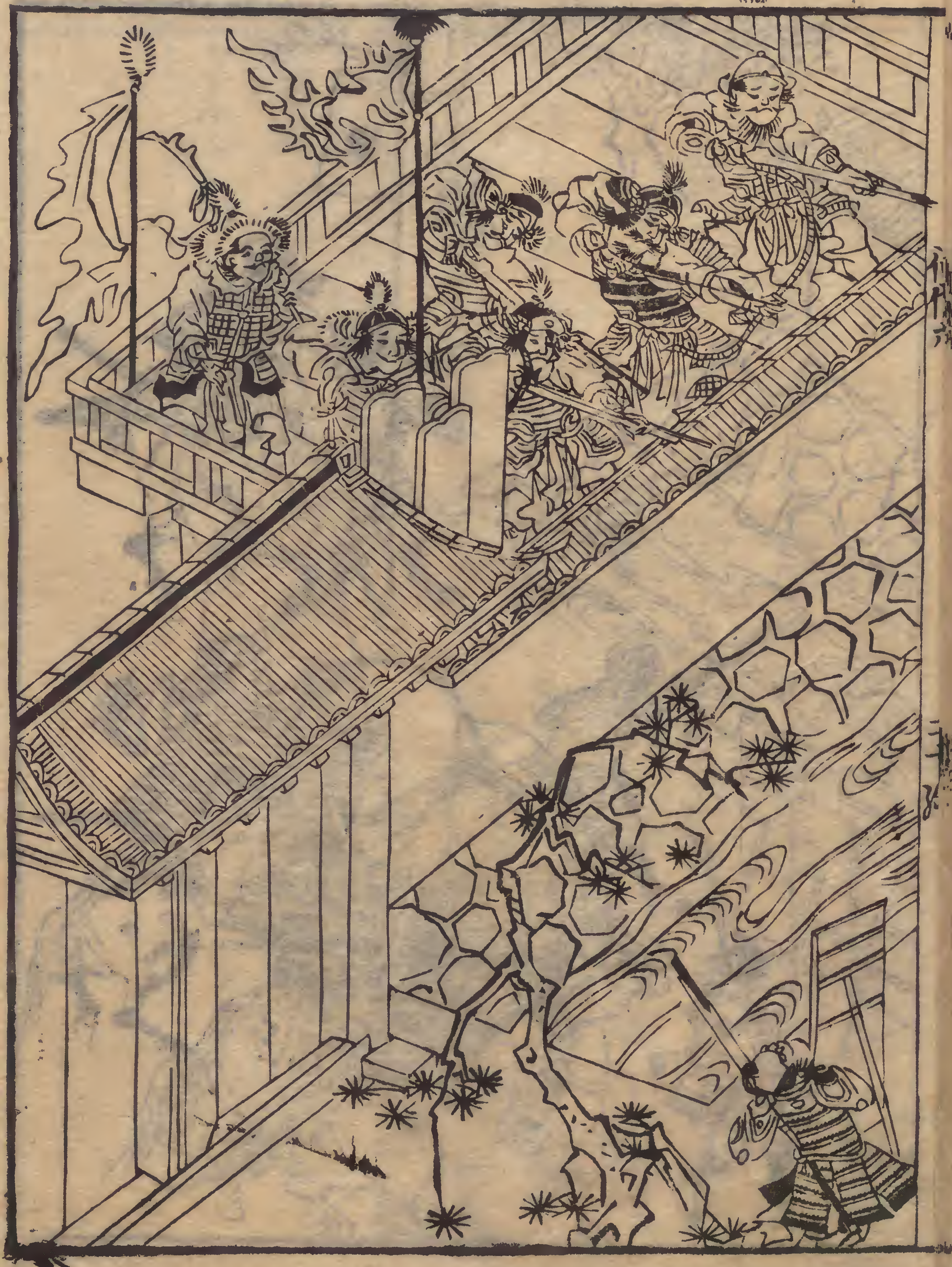
けくぞ本がい分の子十八人西門よりにげさられ先だる
まじくにゐらく。主のり之す分を志づん遼東よりきさ
そうつそりの三子二百一十七人志ろをにげおて。三百
めに思縣鍛よりてうぶ生のらろ乏の一百七十人おり。朝
鮮乃李福男八二寸ものりに大卒言得をもにと
くゑ城中にくうされなり。小西宇喜田にも加夫
将達どつまてもとてこおひびとも三子勝つけとりおて
おひそへ斧山の城へ迫をし。いそぎ日本へつげされ
より全羅加へとうらんて任実とさつくをしてござ
せさうし遼東乃にてもの元帥麻貴より勇悍なり
しておる上の壹あ本れ。先日本人としてくまくて毎

度遼東(どりやうとう)のつはものハ利(り)をうしなへり。最初(さいしよ)に祖承(そせう)
訓(くん)小西(こにし)と平壌(へいじやう)にさゝりあふて、てもなくくじかれ、今度又
揚元(やうげん)遼兵(りやうへい)三千余騎(よき)にて南原(なんげん)を守りて賊(ぞく)をふせぐ
といへどもかなはず。南兵ハ又毎度(まいど)利(り)をうしなへる故(ゆへ)
めかとりて今に遼兵(りやうへい)ハ日本人にあまてんハ、つよにわかなる
南兵(なんへい)ハ日本人にあはたゞしくいくさのまだてをとゝり。大
まはにげて利(り)を見ざれバ、そこらうさうにつく。日
本人(ほんじん)を南兵(なんへい)とハおそれさり。揚元(やうげん)が敗(はい)せしハ知(ち)らさ
ざりしなり

朝鮮征伐記巻第七

全州開城の事

惣督にて南原とせめられんとして留守し。右の軍勢
閑山なれば陳愚衷をはじめとして全州と守らしむ絶え
麻貴をして兵を催し江州と守らしむ南原をせめはとくぞ
ための手配なり。南原と全州の間百余里一日の路
なるべし。愚衷全州に入付し城中に兵粮なし。二
千人の勢とやしなふにまかすまじと覚えし者の志
やうくろ愚衷つくづくと地勢をかんがみて十里が
の山中に来豆鉢甲冑を紙によりてこそ鉄砲
人のかくしをけつりとりわたりてとらへそ城に



へんとは。高麗乃ものこれをめいらくしけるなれバ。朝鮮
いまだ遼東乃兵を借と云へ。又大明の軍勢よせられ給
さらバ其日本人ハよせさらんや。十里乃外の山里にうつし
とく兵粮雑具を時よわたらく入べきかくしおくべきなどこび
とるべし。さしもり日本人へ来りよせなバ城をあけ
のさればともにくるしかるべし日本人ハよう出べし。去るハ朝
鮮乃人民一日もやすんじがたしとあげくらぞくゑ
裏山ところをさらしに敵とりにつるぞ。山中式部兵粮
雑具とのこさんにはとび。兵をわけて蔚山城の周に
をり。南原兵よわてまれ。楊元か事なくしのさをを
ひくぞとくとひをすへし。且裏山とれ候ところ多乃
兵三千人朝鮮の兵とくらべ士卒ともにげまどひ敵
をあくんぞでたちくれこり城中よ防しゐ火のてをあ
げ楊元又城よわつらそれバ。でさくとそらふべし。さ
てさつよくして去りぞくにたて諸乃将物張と兄
ハ南原と高くよせでとらまかするまじ。南原ハまもなく
ひの兵わりとかくにハんをかたくし。こぞんでもちるべし。且
裏にご免をて島津兵庫頭が蔚原島乃みなハ属
の手勢よむかひけれバるを去りて兵儒してもてこれ
を城中のくりこにへれを願ふとれを失ひとせひ
又さし城を堅どもたれど。卒今やよ兵をおくしがぐし
といふてさつしをいづしやらん。これ内南原せめんとと

されバ金国乃百姓ぢごろさまするをひゞけみるをにた
げかくもんでさわぐ兀朮がはたらきのたゝかれどもつ
めんと剣をぬきて面を散しありてせめいらんとする金国
の百姓ひとつになつてまわり城乃兵粮ぐらをやきたて
剰へて城門をうちやぶりぬけかゝり兀朮せん
かたなくあやうく危といふところに二千日宣乃兵なり
つけまゐらせはり乎勢をや任寅よりてうちより任寅
あふともすり二千里あれども兀朮ちる弟をとりおへども
あら城をそくにげちらしぶり乎勢金兵をうち兵粮
ていそうち船あまでおさめとりてまでにわたるをやと
む麻叔高原のりをまもりてとゆかく忠孝よ牛伯英は

つかりし兀朮とまよひしはゝ猪をおこしめんとん兀
朮うけそれども牛伯英すくとうしるすひまぞらも
宗翁よそでまゐりて勢をとりはゝ軍をまもり時の
香西山西お宗翁をせめとり王鐵へのらばつきとひ行
とりれがでこくなるべきと高原金列をたゆやうく
せめとしたる紙一しとめんがてにして此天へ打金
里毛利寧相まつりし高乃一手は兵をあわれ兵
全羅をとしまつさんと金義鉞をとさくもとここを
宗翁ハ王鐵へちりし。それより宗翁乃所よ江にありけり
城より漢江にあり。麻叔ハかしこも日本勢忠孝よ者ある
ハ宗翁を包乃勢をとりとめまゐらせしとせひ動乱

のはてまでもひつけならずをあつかく浮をとほり
孫うけて淮安のたまわまでせんとして。鈔きん人大乱
よつて宋文目すぎて小舩千艘おきり。麻せい
ろく兵曹官とよんで大船とおきてならびまとせ
朝鮮し兵曹官がいとく鈔きんの都末ハ全羅道
よわわとおうかにも全羅残破し兵粮てときにせう
まあれど軍ぞうとむべきやうなし。ことごとく城々と
ゑいまでハ口につけごふまでゑあらん大敵ととう
け。任ハ長ぼうわり全羅ときいまろく見えしが助り
又おほよわてきをうしれど都督あつべし。そうく
兵惟忠とのうし。急ぎ出所と西がしむ。されハ先小西が

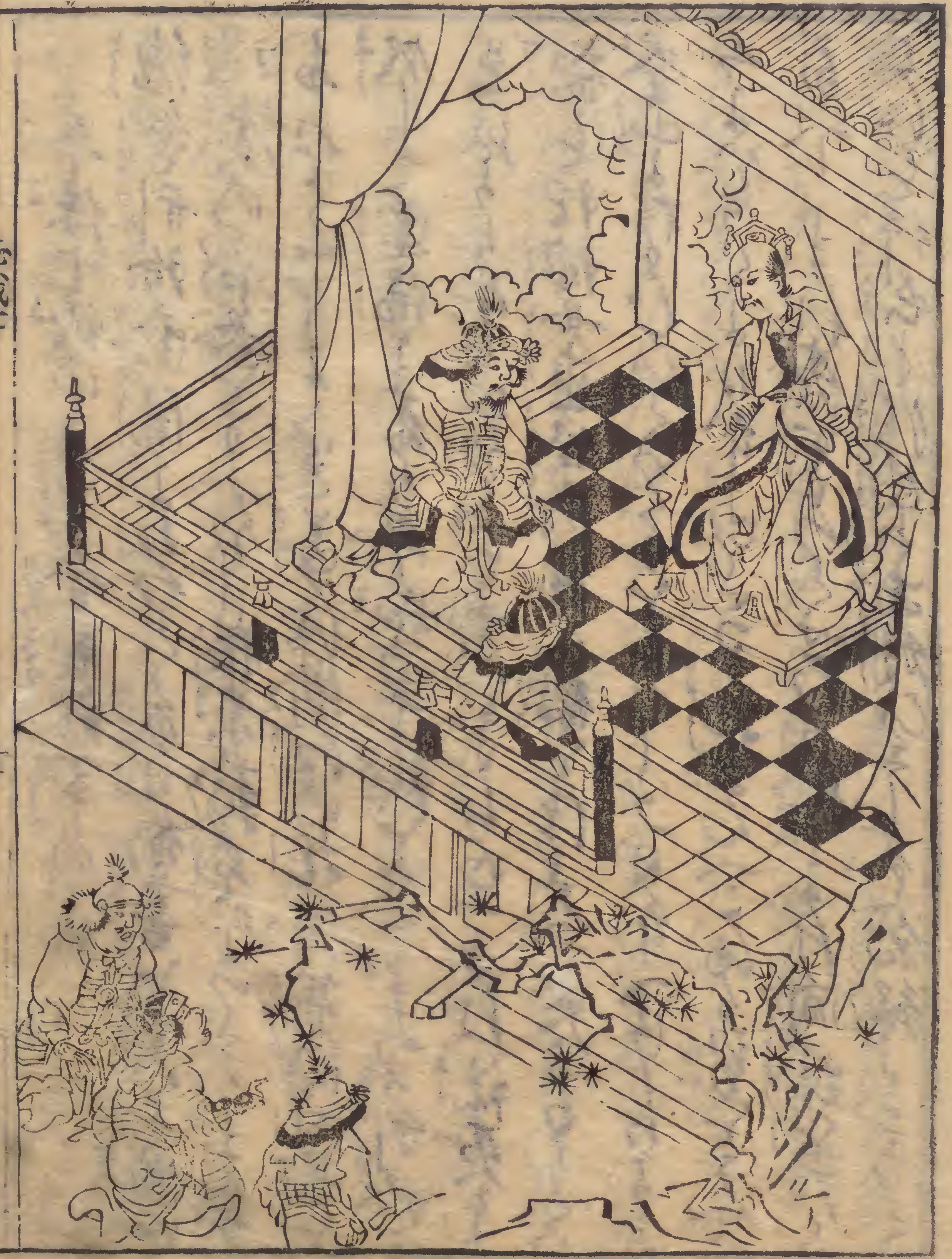
鈔全羅へ行きしきねまでばおしく。江とあるしよて
てもへ宋。鈔羅國まで二城の為め何とちらてかり
将ども宮まで都体宗伐李如元翼と見えんで。将
宮こ大将とひきにむる家わ忠陣まで出でさ
川で敵乃わこさんとさくきぞりとあんでとぞ。されど
其道全羅ハ敵より東に横行すれバさんざう
まうのふりん。國王まづ楊鎬提督といふくずまめ城
乃中老弱婦女乃軍中の要まをたてざるものぞ乱
とぞをおしでさきとさけしむ。此時提督いまだ軍をたて
始して。万事楊鎬が下知まで西へして。楊鎬と平壌に安
座してまたもん。九月朔日に二城の為ちからさとゆかく

王城に来れ共。別によるべのなくしてすむ所なく。ぐで安南全
例とおこされしまゝ、二府のつことなりとて撫と陳
愚衷よつてくさらそくされて。愚衷息くと業じて
あへてもちもんば。此使總督に推すまじば二府の奥
律のつことを流して。宝典によりて。又と氏をとりたて
立てしぬる。今庶然福にても納せんと思とつけて歳をへ
さ庶人におなして。清宜をたゞしくをせり。又郭ちんの
臣氏ひくさとせんと。いふかうなくとこたりつれらち大園
これ。数万の人数久しを助くにさらされ。昔勇とを
なし國王とちぢし先。初ことを申つて。勝とをむちて
許ずしなく。臣ちるものを並うまでふあなとさは。臣と

づくし先ちるの節なし。今度安南原とを守れ全例を
うしおのみるにゆかぞんとすかはおそりくせあられ。國
王これに六八人乃の勢をも引。大将乃大将につかへ
統將をそだけまつし。本安黄海京武威誇字乃の守兵
万余人をまりて経理提督下知によつられぬ億洋絃
難をえくうてもし。先京大職の刀体なる杖柳威銘と
たゝかし。江と堀一をおちよと巡歴し。守護の形勢を
察せし先國王をもえらって聚鍵を殺して。戒る乃
ゐるとうけまゝりあり方にお。一所の海の里の勢に横代
つけ力を殺し。提督経理と共に王京にありて登
夜あらをぞかねりして。むかじ先なし安南原忠勿をとりて

相談のついでとし。王京をすつべきやうなし。かたくまもる
べしとさだめし。むさ李元翼にいひつけれければ。錦せんたん
大事の時なり。茶陀羅尼全羅道より日本勢充満
しければ王城乃あきさきのつなぎの所あわたなりと
こゝに王城へふかきてのたよりとし。又京畿よりすぐに
鴨緑江へのふなみちあれば日本勢ふかく陸地より
せめ入るまでに此所にてふせがんとぞ。わ大らんハ大明
援兵きたりの中にとりこめられ袋の中の鳥のごとく
くなるべし。日本人今一度朝鮮に往すれば是を
ふせがんにはまづ大明の軍兵いまだこあればまれ
兵糧おほくもたせるに日本人は船手をたのみて

を乃る要門こそちらじにきたらに日本人のよせ来るとも
八一には大明の援勢百万騎来るべし。これさらにすくなく
しろくおそれて来らざる。二には沈惟敬とりこと
なりておんなひまかるゆへ。三には朝鮮数年
乱に国とも荒て城に居民なく。唯に一夜の宿
とるべき所もなければ。とてもまさらうくして日本人のこ
ハきつくぞさことに推量とふまもりが藤小西を始大
将ともつゞきよはせられだ。大閤のをさめにわかり
まはらまもりのたかにおそれたる事のまく。王
城をやぶらんと心かけませば。さく人数を揃ねや
うよどかりくの要害をかくして全羅道ぞうへ



為たとうちまつりけれ也けうちよ去ねてうせん乃
ひやうらうを運送しぶくみ志ろち代治せし。
てうせんの恩臣乃たちものとくのへ入れいおを
よろに頭弟あ川てあこうしんをやあちきり

平倭十徳のこと　付　全義艘軍のこと
總督刑玠遼陽にありて毎日檄書をもつて浙江
川廣の客兵をあつめ楊米蕭芳によつてこれをまもらせ
あまねくかうて軍道の浙江の指揮蕭芳が内兵を
卒して遼陽にまかり和の十徳をたゝかはしむ刑玠に
生残りかへりしかば天下ずいとして一には続貴をり
檄をと紀綱女座符の国へ檄をはなちてだしけれバ
釜山によりむかひてきをとゞべし又日本へもかへるべき
ちよからぬくまりおふてさつま鍋島へこゆる勢をさへぎ
るべしこれ夷をもつて夷をせむる也一には同綿をたく
ゆにも行長と清正と両雄ひさしき和解の口措く

威をおそへん間者をつかはし両人のなかをさかせさる
べし二には投降をまねいて今日本の軍勢の関白へ
これ稀せん人ありて日本人法をひとそくにしてのがれ
くるまつわるこうにわうとひいつべしとそれてあてつび我
軍陣へこりさらずやうに剣をかこれをよまいへ
あるまじ財宝ありされたまのふをとらせべきこと
のりきんよのぞむところの官のつかさのよ行の符
一まいづゝけさせて軍中にとらしべし上書にわづ
華人をも本国よりへらんて稀なるものへたとひかた
それがしらをわつたむしとかえへるべしなを又ほ見
わろもの当座の難とのがれんためよのがれ人もの

今まで下りがハこしらくをゆるすべし。さて中に日本の
くにわらひハ将官又ハ士卒にいたるまでひとびとをゑらみ
いだしひとりもおろかならじとも一人もすてらるゝ
ことなし。因貴徳禄ハ例のごとく将にあたふべし。ばけ賞を
日本人へひろむるところのあつまるとくをふべし
とかれ人ことに給えてのぞみ人、まさばのがれハ勢をうしなふ
ときハいかのおんさひをまなぶのちよ刑罰さしくらりこ
とをもちひて利をえて、さうま一まは軍威をけんまん。
わがまゝとならひ川とれハよりし、今大明の営と
も川で朝鮮のいくの所帯天らくを用ひしくしやうら
あれはよろこく日本人へりがいまよとそれども、まで要害の

城とをば朝鮮人へまゐらせ、大明勢ハ一所にあつま
つるかこまれくたらひよのぞんでう川にて大軍
とさせて欽のきうもとひやすべしはうのまうわて
ともちひて戦あまり川軍兵と一所にあつめて三
儀よりち利とゆたりこ一まは士卒よそしゆ朝鮮人
はなる糧あり。三韓乃用りて勇氏乃個あり。
士卒日本へしさらよりくだし、兵を出してじんぜられた今
のはむしにひろべうじ。こと日本勢とせ死ととさ
せた死まで、らく来れて歯兵らく日本人へまかれぞ
いくさをよくせりがごろうと師道として朝鮮人へり
いくさの志やうぞし一人ニ人よりして十人へまかし一えるる

人あまたしへハ一年の内に朝鮮の王を首をのこ
らくなんなくしてハなんぞ関白とききれんやのちに
此法とかちひとへ陸よりかよはんとらくいさ
さりハよりハ毛織を見文すつみん雑兵もとるハ
網をしなりて武具を掌し御舟ハ兵粮をとらぶ
人夫とかまりこれまやうへつれくてて然えん
こも綿の法と行こなふて年をりかはりつべし
と其たむろに斜紀し兵粮をたくはふものハ明年
ハ揃りて云としに其揃りて去しなるもの陣其又
たむろとなさんべし屯営よりちひさく体息
して兵つよく兵粮ハ其くさんなるべしとぞのうま

ハ和談をとるるりかん人のなをとらく志るべし孫子なりしを
くれをまろとのまとまるく兵法のうんようなり今露
寓をうまん丈夫よまゐしら大軍をてまちかくきめてつ
釜山の城をせめんとせば人のさるまもりまて王功
際をさし釜山の城をせめんよりハ舟手へよりさ大将を
つかし大船わきてわけをんば数多里の陸地ととの
つぐ燕京をさくさ無ともするなわるべからし又船手
まひがしよりきらんとせん附親船大将舟師をうけ
海路を知るるやうよわかりらひかんば人のなかなくをゑ
いへとつすまなし是わ急をかなれくる百里の
海路を渡て鴨緑江へらんやっられとをききりして

てきのへいとてもいくさハせじとて引しりぞきけり。爰にのぶ
よ拣揚(ちんかん)ともが船手(ふなて)の大将(たいしやう)たちおほくてきをとうじろを
ばそうけすとやすらひひいたるにようつくあり。九月一日毛利
宰相秀元(さいしやうひでもと)一ゝその軍兵(ぐんびやう)三万余きにうちまじりの
附全義舘(ぜんぎくわん)よいて。全義舘(ぜんぎくわん)ハ王城(わうじやう)とさるまじ百丈
十里をへだてれバ。きんだうよ日本勢(にほんぜい)来るよしときこえて城を
ひらき元く人民(じんみん)ものぐくとかくしてさそいそぎれにて王城(わうじやう)へ
おへ。副総兵(ふくさうへい)解生(かいせい)日本人へのまうをでぐくにて王城(わうじやう)へうち
いりんうとたどろつき。そうて日の軍兵(ぐんびやう)を稷山(ちよくさん)と云る深
との要害(ようがい)におりてくぶんをいて引てわりあひおりおほ
秀元(ひでもと)が先手(さきて)ハ黒田甲斐守長政(くろだかひのかみながまさ)なり。長政がさきて

とらへ流又里とてさそて引みちてこり。日本人へのうち流を
とゆくく。せな流の名みなる藤據(ろうじやう)してわらでてき一人
をもおうりしよて。てきもづくしをみそてんされバ長政(ながまさ)が
先勢(さきぜい)。後藤(ごとう)又兵衛。栗山(くりやま)備後(びんご)をはじめとして二十
騎ごうりけつあをひらきんとせしに。副総兵解生(くわいせい)がやつ
よりあひ。参将(さんしやう)楊登山(やうとうざん)。遊撃(ゆうげき)牛伯英(ぎうはくえい)。日本勢(ぜい)の
ともともおそれたしと五千騎の勢(ぜい)をさしむけ
引あひさりかれバ大勢(ぜい)也。まなうち中にとりこめ一人もあ
ますじとそせる。栗山(くりやま)後藤(ごとう)ら手勢(ゆんで)をもて敵(てき)
とうけ。数十騎(き)を引てとりかへしてとかたきの手
をひ死人(しにん)もすでに見えつゝどもけ勢(ぜい)ハ本陣(ほんぢん)さしてぞ

〽さる程にこれを見てこゝろやすからずおもひつゞけやうとて長
政が二千余騎をさきに川ぞひにつらね秀元が左に備ふ。
かはこゝろくべき二手よりこゝに長政よりさきにすゝんでのりか
けゝればにとひまはしけるのつはものどもむらむらとおそ
ひかゝりければ一千総李寧把揔劉遇節が大
軍をこゝかしこにまもりてありけれども蔚山へより
かゝらんとて引てかへし一せんたゝかふ劉遇節李寧
いはく此地西ぢんかとおしよせて火をかけゝれば
けむりにて百人六千ちりぢりとなり光こゝにさし備へたり
つはもの九騎うたれけるをば西方たゞひとりさへぎりと
めていさつかねてられ秀元が胴なかをおし

まつでも大軍を見て蔚山へにげかへり山中に
せいごもりて引へかへりけるを日をへやすめのこりのさぶらひ
あつまりてこゝろをつくし陣のまはりよりかたくつゝみ
大軍を以て攻寄ばかなはでおなじくいづくへもまつ
とてうけてこもりてありける大明の大軍いまだ来
らざれば王城よりの勢はおほくもあつまらざりけるに
やうやくとつどひて加勢をまつにやりあはせてやましき
かなふべきにあらずと蔚山へうちこんでいりがたくせん
ことをおもひけるにやぢんをしづめてまちけるとかや
まづ王城より加勢のつく所をさしはさみてとりまはすめぐり
すゝんで十月よりなりゆきけるほどにちからをつくし戦

九仙山ちかくこゝらへのきこりをわけてくりこみて
来鋭を避てこそ陣気とうつしよ気まよふて麻
生十すうち先鋒の副将李蹈天と梅勒王とつらりしが甘輝
量勁谷鐵笛のりかゝんとおもひしにんとん。量別
まはちくしよ水の女久留目の守居られ。小勢ぞすく
言うぞくまうすりがてされはようつく山田吉惠元が一与
の内。百ア番茶ぬつ本乃あ二千ぃうさ谷藏しか量
勁まで一日路ひとひよつろうしろう。李蹈梅が量の勁
とおそれんともうありしようちつれ二千里ござり矣
ていさおくしてとくられたり。志ふま梅が無りつまさ
たまはで山とうくさまつくうちそへひ。おかりくのそさ

とうちとゝくせば。二千里の名ようちらさでもかちまるか
らばやもとくと鐵へ今ようり。梅が将軍と諸名
おこまんともろてのとゝそ。ぞ来わけそのうんとは
梅をとも有ふまじしおしつさ方志ろとお谷鐵へ
と志てあづうし　本つよ。谷鐵と大明人せ鈍とも
まちかさ天下れど力をおして。これわ求れへのさか
そりぱ山号よ大河わり。今一そうをおかりされぱい
りでせんとわそうそうさ。そやむべききよわりざれ
雑兵を下手にそる武者と松よぐ世上手を渡し
一時づりよ三千よさゝりくを渡しうり。大明人
要衝の鐵とやとくとえけまでは書山本乃要害

よぢんとぞ見えける。去ほどに十月の夕かたになれバ、宍
気ばかりてうちぬきたるよ。秀元一手のうちまつりの
勢のつかへとまらずけるハ青山のてらを巳とりまき
ひかへける。秀元一手の勢ハ広陽蔚山へうつ陣
陣より一里へだたり。毛利秀元が手より宍戸びぜんの守ハ
一万よきさきへ浅野左京大夫と手をあはせ太田飛騨
のかみハ百余騎ハ敵りのこしつまる利

去冬の大軍朝鮮よりかへらず
十一月中旬刑部郎鴨緑江をわたる時に厳霜にあふ
て雨雪毎日ふりつゞけて十二月廿九日にいたりしかそ
城によつて楊経理麻貴と評議して終に
いくさをせんとて日本人と大明の大軍来る
てきこと世にすぐれしとぞ。まづ行長の陣
とおしよせ日本人の動静をうかゞふ。その行長
きりそくの小屋見を用意し。陣とりて籠とさゞる
山谷の内にみちくて乱暴狼藉をしけり。日本人
おこそまかる城におしよせて大軍ハこれよりたゞ
まで。行兵ハ紅酒よわりて。それ舟手ありて明兵へまちて

けるに清正ハ蔚山にありて要害の地なればはじめ
より総大将のだんかうして此は明兵をとゞめし大軍
を今とこみて蔚山をつゝみて。目方一もらくとんや
とく城を攻めんとなれ共。毎千のたゝかひにありう
して志かも険阻にして月先の要害なりければ
城を引く大ぜいして清正父子対居くゞ舟手に籠
たゞ陣をせんため目前ハ西生浦へゆきて撹乱
くり加藤清正ハ蔚山をのこしてとき毛利家のものに
そ兵おしよせへて蕃清正中なりこれよりつく
唐人ハ清正ハこにおりしせへり。金吾中納言ハ主将な
まば。釜山の城にありてこれわかせて去る十二三万騎

まさんば。大明の兵をもってこれにあたらば日本へは入れ
三手の日大軍なれども主将と偏将とをわけ月翌
一きは入としてただひきたてけるぐんをむけても刑
遼陽より朝鮮の君臣は日本人とたたかはせ
ちげこそむかへしと女ふくれにいはんとするに朝鮮
の君臣に対し大明より援兵を借さんとやくそく
むすぶ国とかはしけるしるしで君臣たちはあら
たに戦ひの義をまもりてなげくるとその浚
てさしとぞへしとぞちげまいらせよつて朝
鮮の兵曹判書李恒福と礼曹の都巡察使接伴
とも捕もししてて十二月朔日より結城の城より

おそらく日本人の援兵ともあるべきかとおもひしに
勢をそがれしかるべくは勢をやぶるべしと下
知とらんにこれまでぞは日本人は日本人
と虎のごとくおそれのがれて陣をさりてひきたる
のみなりける大明の大将はあへけなくもその
朝鮮人はいでやまさんとてつくさずして攫と戦ども
うち天りて李如松祖承訓の両将共につくさ
よかりけれ日本人のこびこうよりて戦ともこの手
まりあそこなをきてうちとりしくびの数八十余
大明の大将はちからなくて日本人追たのましさを
まどひたりけれ。

又李原将軍令と卑将守合その官ありつけたく
りかかりさんせし都きんへつきの爲小と編
きぬかげまりかはおとくさつことゆるし。かん地と
われべしとふれ出さばかげまゐるもの數千人
ありしは付寶府大同薊延綏保定浙福興の兵を
ましくじくまゐらせつかみて燕京浙の兵定子雲南
の爲兵二千二百八十人々と法の川て陳を發とおまかし
をまゐる許國威福建の先鋒の兵一千五百人と然
し應天の先鋒の兵一千人と参將王元周然し
猿山の兵の兵一千五百人福日昇然しまゐりおとく
また文浙福乃の兵をつさき廣東東陸云文

千余三千人をそへてみちをまわり。劉綎が川の岳に陳
廣が岳しハ来国三月よりきたりてこもりし。邢玠
ちくにおいて大将と重坂の志てさひと楊鎬とまり
釜山の城をせめんとするところにされバ釜山乃みち
陸路よりハ梁山の西北よりわけて蔚山後崖あり一路
うちのとりあれば大軍ちりてうなふまじ。又南原より
いれども三浪大江あり。これより全海竹島へ回路より
しけまたそれ二気ハ咽喉乃地なるによりて。日本人これ
をもつてもそれとさらかすゑとまそり。又巨済が
據安骨の一部より立て舟手自由なり。これ又の
とくびわまとはり日本人の手勢わかれるそうわりいんきて

もとへかへしても巨済ハおゝかハおけくまりけるものゝふにて
なし。これをおもひて殊に大梁山三浪江をこへかくし
こゆる大軍をまつねらひてもし巨済まてとをく備まよ
じ。さて巨済のとなりハ梲浦なりくちやんよ清正が
兎浦しられども常にをもくよせまうべし。然也
ハ釜山へよするまゆしうひとうけばてと清正
生浦よりこれをせむるには陸地ハ西よりひかしに
して東莱梲浦よりなるべし。又北よりしてみなこの勢へ
とづまれば蔚山よりかくなれは東南ハ大海西北ハ
山崖なりとつまりて日本へつなぐその城ところにてうく
きり。又舟手よりかかんとされども兎角しかりしかして西

よまゆる兵を馨耳浦にいたり艘せんのために兵を出す所に
とりくれ小勢ども是は大軍の兵を見るとやがてにげさる
べし。とらへえたりとの事一二そうには安東よりのぞむ
ろし。全羅道をふせぐべし。一そうには大丘よりのぞむ
語して忠州で慶尚道をとりきてべし一そうには慶
尚全羅の中にたむろし晋州宜寧よりの西と本
陣としてぐ兵をそろへて釜山梳浦の両城へ陸より
ひろひ兵と東西にかんよりも一度に参陣してせめ
すては志づしと定めくばり諸将のきそそくのん
し。兵を十万余人をまつて三協とし左陣ハ副総兵
李如梅ある歩兵一万三千人を統し総将ハ盧得功率

正征第一図兵陳寅陳大綱也中協ハ中軍副総兵
高策ある歩兵一万一千六百九十人統将ハ祖承訓
劉綎を李寧李紀竜葉靖芹元忠呉惟忠
あり右陣ハ副総兵李芳春歩兵を左にる右宣合一
万一千六百廿人統将ハ牛伯英方時新鄭文彬
盧継忠楊万金陳良玢其余りは又標下の兵将馬歓
査鍾楊登山大同の擁撃掘賓生員の搭雉城
ハうさむるやうてふ鄒よのぞんでにげあへとらさ
らべし。監軍ハ監察御史陳効あり。刑部ハ主事
ハ麻貴と楊鎬と左ニ協の兵を率して分利
島原にわたし東安よ向ふ。慶尚道よりむさ清正が

蔚山とせめ寄とくふ。されバ行長西生浦にこもる
ひきわけはわかちあんと中協乃兵をもつて宜寧
筋よりぞうし。劉綎は泗川のつまりをとられ南ハ
全羅道より南原山をおしてとりてしとる
らしがん。又三協の中より出る一万五百人どもえう
せで劉綎の兵と兵を合せ大安全羅道の右よ
つらして川を大きにこくとたり。順天とせめ寄んと
とろ城とミせて行長を召とまりしのぞりとおり
又平壌をもくへハ兵糧十二万石をそめ下々してやうぞ
太明より又二千万張乃云いてりと日さセあり。や
じやう乃留守ハ大明人三将とのこり。二千余人ある。

おほくもうつくおもうわ。朝鮮乃兵ハ忠清道の節
度使李時言が兵三千并に平安道の兵二千忠
と左縣よ入慶尚道の節度使成允門が兵二千権
慄が兵二百慶尚乃撥厳長が兵一千威鏡道の
原道の兵二千ハ中協よ入慶尚道の鄭起竜が兵一
千黄海道の兵二千防禦使李元帥が兵三百ハ右縣よ
入るも火器大ぶ軍のてんそう一千二百軍千に従軍
十一万八千と。てんそうのころより六万九千七百軍千又行
大小なまり玉一百七十九万六千九百六十七行ハ遼陽
の分守張登なる云ことひそりぽ。山西参將張鎮
鋭心根火砲火箭囲牌仏郎機等の器ハみなりあ

人のとそくものなり。せんだうをてとしてそな
へぎといふことなし。ひやうらうは一月のとそ
なふべしとされしより、まけをしてをこなひ
きたり。

てうせん王あをとも押楽といふをもちてませてん
ただちに兵船の官四人とほかりし三艦一
一人ばかりいまだ。鎮遠皮黄旗をは金羅だの職く
へつりし丈夫にかてもへきりしと下知し。自ら船をゆく
将つづくは大軍雑然と尽くはあるべしとて十日の
合図を妙来して撫兵船にあそびにいるゝの用よ
そあふに陳綾のをみえへいよしといふ尤舟手乃わたら
一団漸の水兵をのがれのはいまさるてさらん。十二月
乃もじ兆天津の巡撫万世徳の云一万并よあ萬
志さ子をともゝく揚帆登萊よりうちて特角せしむ
翁長が城を舟子よわたらし。かた兆にも水兵二千余人へ

さへぎとゞめしを先りの船のあわらいまだにのふべしと
て。劉ちん乃水兵を又かしこめてつかりしむ。又清正命よ
撫張よ居て船とどく鳥ぐ所り出まであらざ
なりぶとさしへよ朝鮮の水兵官李舜臣又百余人へよ
て伏兵の中よおりとしておかへべとあまだ清正
又わかどりそて押へせし国王よはやくかひて
てんとう三百挺弓百張をそへにしやけたよ南兵絶
總乃楊きと千総因をとつうし。李舜臣とぴ
そうに鳥の中にかくれみて何かをうかなくいづくさと示
けむてさわかどりておへしを何正兵さいてし。さ
しもこここてうれへし。下知しうつさ。何陳璘はまで

日本政府図書

来るときくより、それとまうちて船手へうつりしかバ船つくさた
あまたの大将也いひてこれをきゝてえいどこ当して手うけ
へと弱きを合もとし続てそびくさに見れおもの也と
りしかりはもうりてのつくあれなりしに利

朝鮮征伐巻第七終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan